書評

梅津綾子『親子とは何か――ナイジェリア・ハウサ社会における「里親養育」の民族誌』

■出版地：横浜　■出版社：春風社　■出版年：2021年　■総頁数：330頁　■定価：4,100円＋税

有井　晴香*

本書は、ナイジェリア北部地域のハウサをおもな対象として、現在も広くおこなわれている子の引き取り慣行リコ（*ri'ko*）に注目して、親子関係の捉え方を問い直すことを目的として著された民族誌である。地域研究として、リコがどのような慣行なのか分析するだけでなく、近代化以降の日本の親子観も相対化していくことも目的としている。現代日本社会において依然として残る課題として、「一人／一組の親のみを特別視する発想」（p. 26）が根強いこと、および、里親養育や養取はあくまで生親と子のあいだに問題が生じた際に選択される「苦肉の策」（p. 26）として位置付けられること、の二点があげられている。それに対して、著者はリコを「複数的・多元的親子の一つのモデル」（p. 27）として位置付け、複数の親子関係がそれぞれ価値ある関係性として紡がれているさまを描き出していく。

以下、各章の内容について概略を示す。

序章では、まず、アフリカの〈里親養育〉に関する先行研究を整理している。西アフリカでは子の引き取り慣行は一般的なものであるが、とくに90年代までの西アフリカ研究においては出自に焦点があてられることが中心的で、出自の移動を伴わないものは見過ごされがちであったことを指摘している。また、アフリカにおける〈里親養育〉研究においては概して養取の定義をローカルな文脈で捉えるのではなく、西洋の養取概念が援用されがちであったという。

文化人類学における親族研究では、生殖・血縁に基づく関係を親族関係の普遍的基盤とする見方が西洋的な親族観に基づくものとして批判されて以降、生物学的要素と社会的要素を対立的に分析することを乗り越えるような議論が展開されてきた。なかでも、カーステンが提唱した関係性（relatedness）の概念は、「身体構成要素」（サブスタンス）の共有に注目して、親族の文化的構築性の重要性を示したものであり、親子関係の問い直しにもつながっていった。このような流れを受け、とりわけ西アフリカ研究では、親子の構築性が強調されるようになっていったという。しかしながら、結局のところ、生親と育親のあいだの二項対立関係が変わらず強調されているため親の存在の「複数性に目を向けるべき」（p. 37）であると筆者は主張する。

〈里親養育〉に関する先行研究と親族論の流れをふまえ、著者はハウサのリコを「養育上の親子関係が生物学上のそれと同等かそれ以上に重要である可能性」（p. 40）を示す事例として位置付ける。生親と育親のいずれかを特別視するような考え方を相対化し、親子関係の多元性・複数性の可能性を論じていく。

第1章では、調査対象であるナイジェリア北部ハウサの概要について紹介している。おもな調査地であるカドゥナ州ザリア地域とその一地区であるボーモー村の地理的・歴史的特徴や生業について説明したのちに、ハウサにリコが根付いている背景として、親族関係および衣食住・教育・医療といった日常生活の概要を描き出している。

つづく第2章において、76名の調査協力者への聞き取りに基づいて、リコの概要と注目すべき特徴について示している。ハウサにおいてリコは「日常的にありふれた行為」（p. 116）であり、引き取りに際して特別な儀礼などはおこなわれない。一般に親族間で子の引き渡しがおこなわれるが、生父の友人男性に引き渡されることもあるという。また、育親に実子がいる場

* 北海道教育大学

合でもリコはおこなわれうる。卒乳期以降に子は引き取られ、著者の調査においても引き取られた年齢が2歳以上の子が大半であった。引き取られる年齢は、その理由・経緯によるものと考えられるが、リコの特徴として育親・生親それぞれの事情において、子の引き渡しに必ずしも逼迫した理由があるとも限らないことがあげられる。また、事前に打診があるとは限らず、時に突発的におこなわれることもあるという。さらに、リコの関係性は解消されることもありうるなど、柔軟かつ流動的におこなわれるものとして特徴付けられている。

第3章から第5章では、具体的な事例をもとに、リコをめぐる育親・生親・子の関係性について詳述している。第3章は本書の中心的な章であり、当事者の語りと観察をもとに、リコを通して子育て期において、どのような生活が営まれるのかを描き出している。リコにおいて生親と育親のあいだの出自上のつながりは必ずしも重要ではなく、「信頼関係が構築できているかどうかが、生親がわが子を委ねる上で重視されて」（p. 158）おり、「親族内にせよ友人同士にせよ、伝統的なリコは生親と育親の信頼関係を担保におこなわれる」（p. 160）。このような信頼関係を基盤として、双方が配慮しあう形で〈子〉[1]の養育はおこなわれている。たとえば、基本的には育親が、子育てにかかわる経済的な負担をする責任があると考えられているが、場合によっては、生親が補助することもある。その際に、あくまで育親に責任があることに留意して、「育親としての尊厳」を保つようなやり方で経済支援がおこなわれている。また、ハウサでは父親の名前を名字として名乗るが、〈子〉の名字を変えるか否かはそれぞれの状況によるものであり、「〈子〉の名字は、育父が自分への帰属を可視化させたい欲求と、〈子〉や生父への配慮の狭間で葛藤した結果」（p. 197）として捉えられる。基本的に行事の際に双方が行き来するような形で〈子〉と生家の人とのあいだの交流はおこなわれており、「リコは〈子〉の家族・親族を増やす機能を持ちうる」（p. 205）と考えられ、生親と育親のあいだの信頼関係は、〈子〉にとって手厚い保障となる仕組みを生み出しているという。

第4章では、〈子〉が結婚した後、親子関係はどのように捉えられるのかについて検討している。〈子〉の結婚行事へのかかわり方、結婚後あるいは離別した場合の居住地の選択、財産分与の考え方などについて分析することによって、全体的な傾向として、〈子〉が育親・生親のうちいずれか望む方との関係を強化しながらも、もう一方との関係も維持されていくことを明らかにしている。子ども時代の育親との共住経験が親子・家族関係の基盤となりうるし、また、結婚行事などを機に成長後に生家との関係性が親密になる可能性もひらかれている。

ここまでの章では繰り返し、育親が親としていかに重視されてきたかが述べられてきたが、社会的文脈や場面によっては、親ではなく別の位置付けがなされることがあるという。第5章では、育親が社会的文脈・状況に応じて「親」として認められる場面とそうではない場面があることに対して、育親の「親としての弱さ」と「強さ」（p. 259）という側面から考察を加えている。親の親としてのあり方を相対的に評価する指標として生親に言及されることがあり、そこには生親が「親」のモデルとして位置付けられていることが読み取れる。この点において、一見、親としての弱さを育親がもつように思われるが、こうした言い回しを用いることによって育親の社会的存在感の強さがアピールされており、「生親を「親」のモデルとする概念と、育親が「親」として重視される実態が混在しているのが、ハウサの「親」のあり方の現状」（p. 266）であると分析する。

終章では、これまでの議論をふまえて、ハウサの親子観から親子を捉えるアプローチについて考察している。ハウサにおいては複数の親と〈子〉の関係性のいずれか一方が正統化されるのではなく、相互に尊重されるものである。この強力なセーフティネットを成立させる背景には、「信頼（アマナ）」を基盤とした養育関係があると述べている。リコにおいては、子の養育関係を結ぶに先立って、親同士のあいだに「信頼」があることが前提であり、生親―〈子〉―育親が相互に尊重しあって共存が成立している。こうしたハウサの共存関係は現代日本の親子観とは異なるものと筆者は指摘したうえで、「生物学上・養育上の要素を一元化して親子関係を捉えうる理論的枠組み」（pp. 284–285）を提案する。行為に注目して関係性を捉えるサブスタンス論は、ハウサのような生物学的要素も同時に重視

1　本書では、生みの親以外の大人に引き取られた子を〈子〉と表記している。

するような考え方とはそぐわないとし、代わって関係論的存在論に注目する。すなわち、個人は複数の他者との関係性に基づいて構築されるものであると捉えることによって、親子関係の内実によらず、親と子の関係性として一元的な親子像を描くことが可能になるのだという。

本書は積み重ねられたデータをもとに豊かな親子関係のあり方を描き出したものであり、近年、問い直しがすすむ親族研究において示唆に富む事例を提供するものである。それぞれの親との関係性が子の存在を構築するという捉え方は、親族（kinship）を「存在の相互依存性（mutuality of being）」を示すものとして論じた M. Sahlins（2011a; 2011b）の議論に連なるものと考えられる。

また、とくに興味をひかれる点として、親子関係を記述するにあたり、親による子の養育実践にだけ焦点をあてるのではなく、子育て期が終わったあとの相互関係も含めて、育親・生親・子をめぐる関係性を豊かに描き出している点をあげたい。親子関係に関する論考では概して子育て期において親がいかに子を育てるのかという一方的な養育実践に焦点があてられがちなのに対して、本書は子育てに限らず親と子の関係とはいかなるものかを一貫して問うものである。

こうした姿勢はケア論の観点からみても意義深い。本書のなかでは「ケア」の語は用いられていないが、親と子のあいだのかかわりあいと配慮について記述した子の育ちにかかわる論考である点において、ケアをめぐる議論としても示唆に富む。著者がハウサの親子関係を分析するにあたり注目したのは「未成年者（ここでは〈子〉）の生に決定的なものを与える者との関係性」（p. 288）であり、「決定的なもの」の具体例として身体や出自、法的な権利に加えて、愛情、衣食住、医療、教育といった生活にかかわる実践をあげている。言い換えるならば、これらは相手を「気にかける」具体的な行為であり、ケアの実践と考えられるものである。所与の関係性を前提としてどのようなケアがおこなわれているのかを問うのではなく、ケアの実践を通していかなる関係性が立ち現れるのか（Thelen 2015）という観点からみると、本書で示された多様なケアの形は親子のあいだの関係性だけではなく、より広い社会的な関係性も含みこむものと考えられる。ケアをめぐる実践を「ケアするひと」と「ケアされるひと」のあいだのやりとりとして想定した場合、二者関係の相互行為に注目しがちであるが、リコの事例を通して描き出されたのは二者にとどまらない、三者関係のあいだで相互に配慮することによって生じるケアのネットワークだったのではないだろうか。

なお、些末なことではあるが、考察部分において若干の疑問を抱いた点についても述べておきたい。一対の親子関係が差異化され特別視されるような親子観を相対化することに主眼が置かれ、説得的に事例の分析が積み重ねられていたなかで、「リコにおける「本当の」親とは誰なのか」（p. 276）という問いがそのまま提示されたことには、やや釈然としなかった。ここでは、「「本当の」親」を「〈子〉が最も重視する」親として考えた場合に、それぞれの子によって異なり、「育親も生親も「本当の」親になりうる」（p. 276）と結論付けているが、注釈において、調査協力者に「「本当の」親」を問う質問はしなかった理由として「「本当の」という概念自体が何を指すのか曖昧であり、調査協力者を困惑させると考えた」（p. 295）と述べているところにこそ著者の主張が含みこまれているように思える。すなわち、「「本当の」親とは誰か」を問うこと自体が問い直されるべきであり、それは著者自身が注釈でも述べていたことからも推測できるようにローカルな文脈においてはそぐわない概念であろう。ここでの著者の主張として「本当の」親を特定したいわけではないことは本書全体の記述から明白であるものの、ともすれば、親の序列化という発想自体は、結局のところ問い直されずに継承されているような印象を与えかねないのではないだろうか。また、このことと関連して、親として果たすべき役割・責任と子に対する権利についての記述に関して、「本当の」親の概念と責任や権利がいかに結びつくのかについてもより詳しく知りたいと思った。「本当の」親の概念自体が解体されるとき、親としての責任や権利は親子関係の形成においていかなる作用をするのか気になるところである。

とはいえ、こうした点は本書が示したハウサにおける親子関係の豊かさの描写を損なうものではない。本書は「親子とは何か」というシンプルな問いに対して複雑な諸相を丹念に描き出していく読み応えある民族誌であり、文化人類学のみならず広い分野の読者を惹きつけるであろう。

参照文献

Sahlins, Marshall
2011a What kinship is (part one), *Journal of the Royal Anthropological Institute* 17 (1): 2–19.

2011b What kinship is (part two), *Journal of the Royal Anthropological Institute* 17 (2): 227–242.

Thelen, Tatjana

2015 Care as Social Organization: Creating, Maintaining and Dissolving Significant Relations. *Anthropological Theory* 15 (4): 497–515.